

第3回 こども急性疾患学寄附講座（神戸市）公開講座

「こどもたちの命を守るために」

日時 2010年**12月11日**（土）14:00～16:00

場所 「神戸大学医学部外来診療棟 6階 大講義室」

（神戸市中央区楠町7-5-1
神戸大学病院敷地内、地下鉄大倉山駅より徒歩5分）

あいさつ 公開講座

I. 14:10～14:40

乳幼児突然死症候群からこどもを守るために

講師 神戸大学大学院医学研究科内科系講座小児科学分野こども急性疾患学部門
特命助教 **久保川育子**

II. 14:40～15:20

思わぬ事故からこどもを守るために

講師 神戸大学大学院医学研究科内科系講座小児科学分野こども急性疾患学部門
特命助教 **矢内 友子**

III. 15:20～16:00

命に関わる急病からこどもを守るために

講師 神戸大学大学院医学研究科内科系講座小児科学分野こども急性疾患学部門
特命教授 **竹島 泰弘**

参加費無料



病院「南入口」右手、「学生ホール」入口より
入りエレベーターで6階

お問い合わせ先

神戸大学大学院医学研究科内科系講座小児科学分野こども急性疾患学部門
TEL (078) 382-6090

- ◆主催：神戸大学大学院医学研究科内科系講座小児科学分野
こども急性疾患学部門（寄附講座）
- ◆後援：神戸市・神戸市医師会

乳幼児突然死症候群から子どもを守るために

神戸大学大学院医学研究科内科系講座 小児科学分野こども急性疾患学部門

久保川 育子

乳幼児突然死症候群(SIDS シズ)は、それまで元気でミルクの飲みもよく、すくすく育っていた赤ちゃんが、ある日突然事故や窒息ではなく、眠っている間に死亡してしまう病気です。日本では、年間約 200 人の赤ちゃんがこの SIDS で亡くなっており、乳児死亡原因の第 3 位となっています。

SIDS は、生後 1~4 カ月ごろが最も多く、そのほとんどが 1 歳未満の乳児期の赤ちゃんに起きています。原因はまだよくわかっていませんが、もっとも考えられている病態は睡眠時の無呼吸からの回復が遅れる覚醒反応の異常です。そして、育児環境の中に SIDS の発生率を高める因子があること、その危険因子を減らすことで SIDS の発症率を少なくすることが数々の研究で明らかになっています。日本においても、1997 年から①あおむけ寝で育てよう、②たばこをやめよう、③できるだけ母乳で育てよう、④なるべく赤ちゃんを一人にしないで、の 4 つのリスク因子を挙げ、SIDS 予防キャンペーンが行われました。それによって、SIDS の発生が減ってきています。

一方で、SIDS は主に生活の場である家庭で発生することから、SIDS で子どもを失った家族、特に母親は、今まで元気であった子どもの突然の死に精神的なショックを受けるとともに、自分の過失ではなかったのかという自責の念に駆られることが多くなります。また、最近では保育所や産院などで発生した突然死が管理上の不手際による事故なのか、不可抗力の SIDS であるかが社会的にも大きな問題となっています。

SIDS が十分理解され、正しく社会に認識されることにより、子どもとその家族の健康が守られることを願っています。

MEMO:

思わぬ事故から子どもを守るために

神戸大学大学院医学研究科内科系講座 小児科分野こども急性疾患学部門

矢内 友子

不慮の事故は小児死亡の主な原因であり、2009年の年齢別死亡原因において、5-9歳の死亡原因の第一位、1-4歳・10-14歳の第二位を占めています。8年前と比較しその割合は減少しているものの、依然たくさんの子どもたちが事故で死亡しています。事故は防止可能なものであり、事故対策で多くのこどもの命を救うことができます。

事故の多くは家で起こっているため、家での事故対策を重点的に行う必要があります。住宅設計のためには、こどもの身体計測・身体能力測定を行い、こども目線で考えることが必要であり、さらにこどもの安全性を考えた“キッズデザイン”というコンセプトも登場しました。国民生活センターは、危害・危険情報を収集しその情報を社会に伝えるとともに、商品の安全性を検証しています。

代表的な家のなかでの死亡事故は転倒・転落、溺水、窒息です。特に日本では浴槽での溺水が多く、これらの事故の現状をお伝えし、予防法について提示します。また、誤飲や近年増加している小児の熱中症、医療事故についてもお伝えします。

MEMO:

命に関わる急病から子どもを守るために

神戸大学大学院医学研究科内科系講座 小児科学分野こども急性疾患学部門

竹島 泰弘

こどもの病気の多くは自然に軽快することが多いですが、中には重篤な合併症を呈し、命に関わることもあります。そのため、こどもが発熱・咳・嘔吐・発疹などの症状を呈すると、親としては心配です。このような急病から子どもを守るための方法の一つに、予防接種があります。日本では、三種混合、BCG、ポリオ、麻疹（はしか）・風疹混合、日本脳炎ワクチンが定期予防接種として行われており、それ以外に任意の予防接種としてインフルエンザ菌b型（ヒブ）、肺炎球菌、インフルエンザ、水痘（みずぼうそう）、流行性耳下腺炎（おたふくかぜ）ワクチンなどが行われています。本講演では、予防接種に関する最近の話題の中から以下のものを取り上げます。

1. 麻疹は、医学が進歩した現在であっても命に関わることもある重篤な感染症です。その頻度は減少しているものの依然として発症はみられ、2007－8年にも高校生・大学生の間での流行が問題となりました。麻疹をきっちりと予防するためには2回の予防接種が必要です。日本では、2012年までに麻疹をゼロにすることを目指し、現在、第1期から4期の予防接種を行っています。
2. 日本脳炎の予防接種について、2005年に従来ワクチン接種後の急性散在性脳脊髄膜炎が問題となり、積極的勧奨を行わないように勧告されました。その後、2009年から新しいタイプのワクチンが、1期の予防接種で使えるようになり、2010年からは2期でも使えるようになりました。
3. インフルエンザは、毎年話題になりますが、特に昨年は新型インフルエンザの大流行で大きな社会問題になりました。今シーズンは、新型インフルエンザと、季節性インフルエンザA型・B型の混合ワクチンの接種が始まっています。
4. 2008年からインフルエンザ菌b型（ヒブ）、2010年から肺炎球菌（7価）ワクチンの接種が開始されました。これらは乳幼児に髄膜炎などの重篤な感染症を引き起こす細菌感染から子ども達を守るものです。前回の公開講座でも触れましたが、再度説明いたします。

MEMO: